早稲田大学大学院文学研究科
博士学位申請論文審査報告要旨

申 請 者 氏 名	入倉友紀
学 位 の 種 類	博士(文学)
論 文 題 目	ブルーバード・フォトプレイズ再考 ――比較映画史研究と女性へのまなざし――

審査要旨

本論文はユニヴァーサル社の傘下で 1916 年から 1919 年にかけて映画を製作した、アメリカの映画会社ブルーバード・フォトプレイズ(以下、ブルーバード社と略記)に関する研究である。この会社は本国アメリカの映画史において重要な会社として研究されることはこれまでほとんどなかった。つまり歴史的に影響力を持たない、マイナーな会社であった。しかしブルーバード社は世界の映画史の中で唯一、日本映画史において非常に重要な役割を演じており、1910 年代後半の日本映画史を語るうえで、必ず登場する映画会社である。日本人の映画観客にとって大変ユニークな存在であったこのアメリカの映画会社がアメリカ映画史と日本映画史の双方において、どのような歴史的意義を持つものであったのか、とりわけ映画における女性の役割という問題に視野を向けながら、比較映画史的な方法で歴史記述が行われている。

全体は 3 部構成 7 つの章より出来ている。第 1 部はフランスやイタリア映画に比べて映画の長編化への移行が遅れたアメリカ映画における 1910 年代において、いわゆる活動写真小屋であったニッケルオデオンにおいてどのような映画の番組が提供されていたか、そして大型の本格的な映画館であるピクチャー・パレスの登場によって、そうした番組がどのように変わっていったのかを論じ、そのような状況下で、ユニヴァーサル社が 1913 年以降長編映画の製作に乗り出す状況が解明される。1915 年 3 月に新たなユニヴァーサル・シティと名付けられた撮影所をオープンしたのち、ユニヴァーサル社は長編映画を専門に作る製作ユニットを持つようになる。翌年に誕生したブルーバード社も、そうした製作ユニットの一つであった。

第 2 部ではブルーバード社の設立と展開が記述される。作品の質にこだわった 5 リールの長編映画を製作し、週に 1 本配給するという方針を立てたこの会社の初期の製作体制を運営したのは H・O・デイヴィスであった。ブルーバード社の映画はどのような観客層にも受け入れられる健全な作品群であることをアッピールした。とりわけこの時期に台頭してきた女性や子供といった新しい観客層を取り込むことがめざされた。その結果、ある程度保守的な価値観を内包した映画群が製作されていった。

こうしたブルーバード社の映画群はこの会社の設立とほぼ同じ時期に日本でユニヴァーサル・ハリマ商会が設立されたこともあり、製作当初の作品から大量に日本に向けて輸出された。トータルで見ると、ブルーバード社が製作した映画の約 8 割が日本で公開されたことになる。浅草で帝国館を経営していた小林喜三郎は早くからブルーバード社の映画の価値に気づいており、この会社の映画を積極的に宣伝した。帝国館が発行する映画館パンフレット『第一新聞』には、一般観客の投稿欄を設けられていたが、そこではブルーバード社の映画に感動した観客からのメッセージが多数掲載された。また、小林が支援していた月刊の映画雑誌『活動之世界』をも利用し、ブルーバード社の映画のプロモーションを行った。日本の映画観客はブルーバード社の映画の、小品で詩的な美しさを評価した。遠い異国で展開する物語や主人公に対して、若い日本の観客がどことなく親近感を感じるという、新たな映画体験をブルーバード社の作品群は与えてくれた。

第 3 部はブルーバード社と女性に関する論考である。ブルーバード社は設立当初から、適切な物語に適切な俳優を当てるという方針で、ある意味映画のスター・システムを否定するような製作の体制をとっていた。だが日本の映画観客は、そうしたブルーバード社の製作方針とは反対に、この会社の映画に出演する俳優たちの魅力を見出し、『第一新聞』のような映画パンフレットや映画雑誌の中で、俳優たちの素質について熱心に議論した。ブルーバード社の映画に出演し、日本でも大変人気のあった二人の女優、メアリー・マクラレンとマートル・ゴンザレスを例に、彼女たちが全く異なった形で日本において独自のスターダムを確立していく過程が論述されている。

ユニヴァーサル社は 1910 年代に女性の参画を最も積極的に取り入れたアメリカの映画会社であった。その傘下にあったブルーバード社には 3 人の女性監督が在籍していた。ロイス・ウエバー、アイダ・メイ・パーク、エルシー・ジェーン・ウィルソンの 3 名である。男性優位の映画会社において、こうしたユニヴァーサル社における女性登用の影響は、日本においてはとりわけ松竹蒲田撮影所に見られた。アメリカの撮影所システムを模倣して誕生した松竹蒲田撮影所において、所長の城戸四郎は脚本家として正式に水島あやめを採用し、松竹初の女性脚本家を誕生させている。また松竹のスター女優であった松井千枝子は、自身の主演作の脚本を執筆している。1920 年代、松竹は映画製作においてユニヴァーサル社の、題材の面ではブルーバード社の影響を受けたのではないかという推測がなされている。

日本映画史においては頻繁に登場するブルーバード社の映画が、アメリカ映画史のコンテクストにおいても

申請者氏名　入倉友紀

重要性を持つことを本論は明らかにした。そして日本映画とブルーバード映画の結びつきに関しても従来の議論をしっかりと整理し、とりわけ日本映画における初期の女性の活躍というこれまであまり顧みられなかった主題の重要性を指摘している点でも本論は独創的である。アクセスの困難な一次資料を最大限に利用し、1910年代の映画史の顧みられてこなかった主題を客観的に明確なものとした本論文の価値は、審査委員一同によって認められた。これにより審査委員全員は、本論文が「博士（文学）」の学位を授与するのにふさわしいものであると判断した。

審査会開催日	2024 年 1 月 29 日

審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	小松　弘	映画史	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	藤井仁子	映画史・映画理論	
審査委員	早稲田大学文学学術院・准教授	角井　誠	映画史・映画理論	博士（パリ第１大学）
審査委員	明治学院大学文学部・教授	斉藤綾子	映画理論	博士（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）
審査委員				